

外国人学校生徒の日本語語彙習得に見られる表記の特徴 文字表記の選択に見られる課題

安藤 淑子

Characteristics to be seen in the Japanese vocabulary acquisition of the foreign school students : Problem to be seen in choice of the notation

ANDO Yoshiko

Abstract

A problem about the notation of the foreign learner includes choice of two kinds of Kana. The learner can replace vocabulary got in a spoken language with Kana. However, he/she cannot determine which one he should use.

I analyzed the vocabulary test for the student of the foreigner school to know what kind of problem children of a limited vocabulary had in notation in this report.

As a result, instruction about the choice of the Kana notation is indispensable for a learner in the living environment mainly involving the Japanese as the spoken language.

キーワード：外国人学校、語彙習得、仮名、表記選択

Key words: foreign school students, vocabulary acquisition, Kana, choice of the notation

1. はじめに

山梨県立大学では、2009年9月より、大学と県内の外国人学校をつないで遠隔の日本語教育を実施している（安藤 2010、2011a、2011b）。遠隔教育は大学と外国人学校をテレビ電話システムで繋いで行われ、教育の主たる目的は日本語の補習授業である。具体的には、外国人学校で行われる文法・文型を中心とした日本語学習（週2回2時間）を補完する形で日本語の語彙の補強と会話練習を行っている。

2011年度は、遠隔日本語教育の実施に際し、事前に生徒の語彙能力を測定するためのテストを行った。本稿ではテスト結果から、外国人学校の生徒に見られる語彙の特徴と、文字表記指導における課題を検証する。

2. 語彙テスト

2-1 実施の方法

テストは印刷された絵の下に、該当する日本語の単語を書くという形式で行った。単語数は80語ですべて名詞である。時間は1時間程度、受験場所は外国人学校内の教室内で筆者および学習支援者の監督の下に実施された。

受験した生徒は8名（A～H）で、全員がすでに日本語の平仮名・片仮名を学習している。生徒A、B、Cは調査段階では『みんなの日本語初級Ⅱ』（スリーエーネットワーク）の31課を、生徒D、E、F、G、Hは『みんなの日本語初級Ⅰ』（同上）の第19課を学習中であった。

A～Cは外国人学校の8年生（日本の中学3年生に相当）に、D～Hは高校生クラスに在籍している。来日した時期および学習環境等が一律ではないため、同学年であっても日本語能力に差

異がみられる。なお、8名のうちDとEは、2～3年間日本の小学校に在籍した経験がある。

外国人学校内の授業は日本語を除きすべてポルトガル語で行われ、8名の両親はいずれもブラジル人である。家庭内で話される言語はもっぱらポルトガル語であり、日本語に接するのは学内での日本語の授業と学校を訪れる日本人ボランティアの接触に拠るものである。また、私的な時間に接するテレビやゲーム、その他買い物など日常生活において日本語に接する機会がある。

2-2 テスト結果の分析

2-2-1 語彙の種類に見られる特徴

テストの得点は下記の通りである(表1)。採点基準は、完全な正答を3点とし、部分的な誤りのあるものを2点、表記の選択や判読に大きな支障のあるものを1点、無記入および完全な誤答を0点とした(基準については後述)。8人の生徒による80語それぞれの総得点を図1に示す。

全語彙の中で、8人の総得点が20点～24点であった語彙は24語である(表2)。これを語彙上

表1 日本語語彙テスト結果

	A	B	C	D	E	F	G	H
得点	203	159	208	187	239	136	56	119
平均	2.5	2.0	2.6	2.3	3.0	1.7	0.7	1.5
得点率	84.6	66.3	86.7	77.9	99.6	56.7	23.3	49.6

(満点 = 240点)

表2 総得点20～24点の語彙(上位グループ)

語彙	みんなの日本語初級I	総得点	語彙	みんなの日本語初級I	総得点
はし	7課	24点	はさみ	7課	21点
たまご	6課	24点	いす	2課	21点
もも(ピーチ)	提示なし	24点	おちゃ	19課	21点
ねずみ	提示なし	23点	すし	12課	21点
くるま	8課	23点	にく	6課	21点
おかね	7課	23点	さかな	6課	21点
りんご	11課	23点	うち(いえ)	3課	20点
めがね	22課	22点	さる	提示なし	20点
かばん(バッグ)	2課	22点	じてんしゃ	5課	20点
とり(はと)	提示なし	21点	ひこうき	5課	20点
いぬ	10課	21点	かぎ	2課	20点
とけい	2課	21点	コーヒー	2課	20点

()内は許容した語

表3 総得点0～9点の語彙(下位グループ)

語彙	みんなの日本語初級I	総得点	語彙	みんなの日本語初級I	総得点
ペン	提示なし	9点	なべ	提示なし	6点
どうぶつえん	提示なし	8点	だいどころ	提示なし	5点
はぶらし	提示なし	6点	コップ(カップ)	提示なし	5点
さら(ちゃわん)	提示なし	6点	やかん	提示なし	3点
フライパン	提示なし	6点			

()内は許容した語

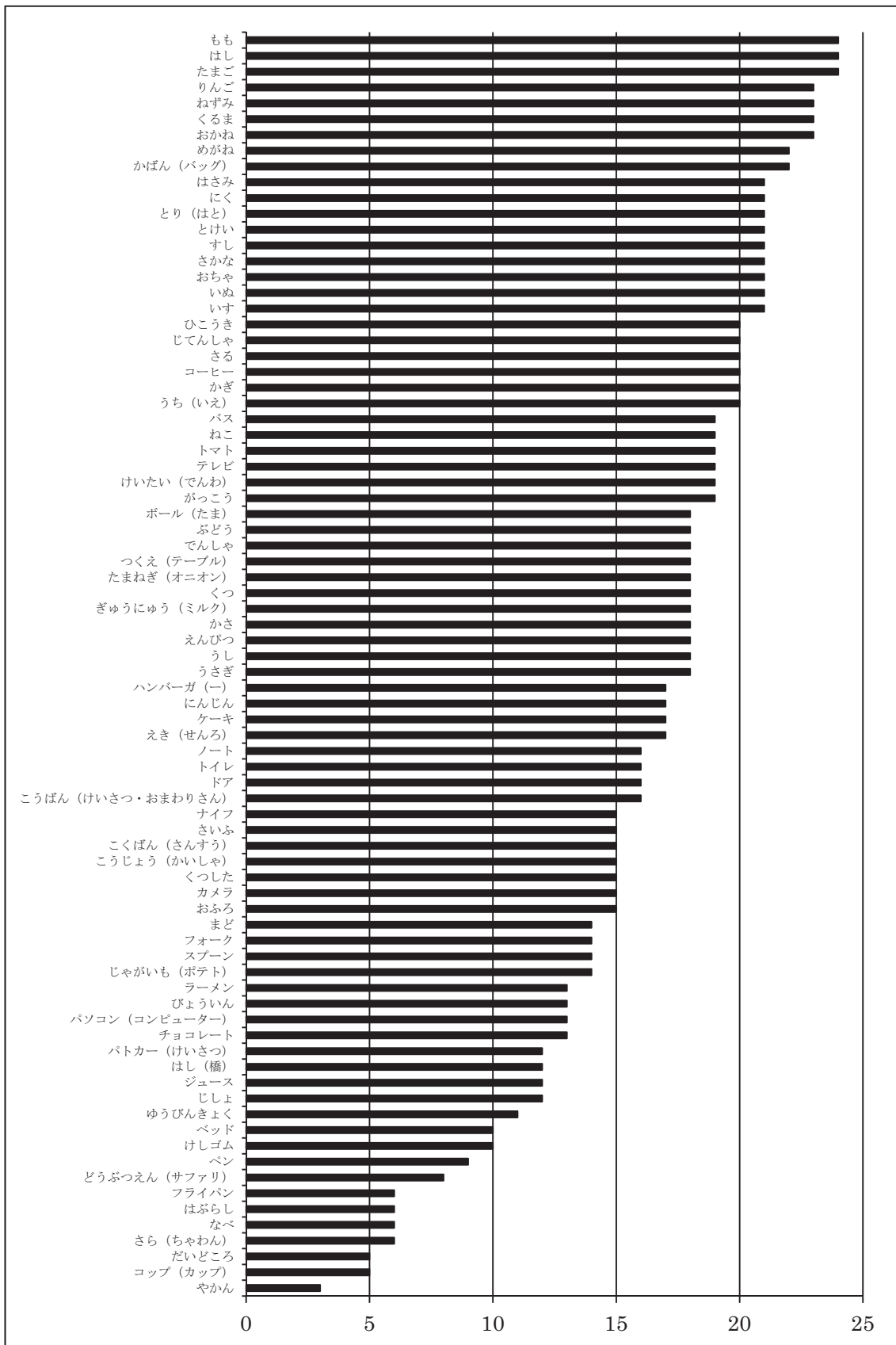


図1 語彙テストにおける各語の総得点

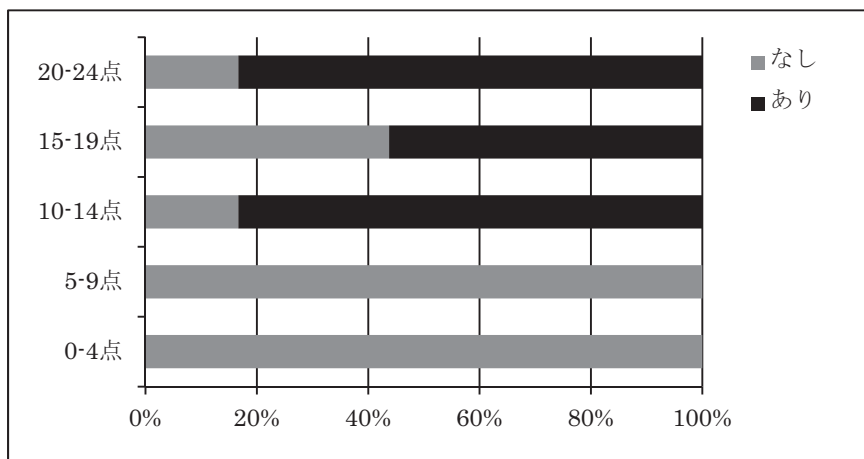


図2 各語の総得点とテキストにおける提示の有無

位グループとする。総得点が10点未満の語彙は9語であった(表3)。これを語彙下位グループとする。

表2、表3には語彙が学習中、あるいは学習を終了した『みんなの日本語初級I』に含まれていたか否かを示した。下位グループの語彙は、いずれも『みんなの日本語初級I』では取り上げられていない。

語彙テストにおいて出題された80語のうち、『みんなの日本語初級I』に提示されているものは50語(62.5%)、提示されていないものは30語である。これらの語彙が、点数区分中にどのように分布しているかを見るために、総得点を5点単位で区切り提示の割合を示したものが図2である。これを見ると、得点の高い語彙が必ずしもテキストに提示されているとは限らないことがわかる。

15-19点の間に含まれる32語中、テキストに提示されていない語は14語(43.8%)である。内訳を下記に示す。

けいたい(でんわ)、トマト、うし、うさぎ、ボール(たま)、ぶどう(グレープ)、たまねぎ(オニオン)、ハンバーガー、にんじん(ニンジン)、こうばん(けいさつ*)、こうじょう(かいしゃ)、さいふ、くつした、こくばん(さんすう*)

*は許容の解答が多数であったもの

受験した8人の中で、もっとも総得点が低かったのはGである。Gが高得点(2-3点)を取った語彙を下記に示す。19語中16語が語彙上位グループに含まれている。

もも、りんご、にく、たまご、すし、いす、はさみ、かばん、めがね、くつ、くつした、おかね、けいたい、はし、ねずみ(以上3点)、おちゃ、コーヒー、かぎ、くるま(以上2点)

2-2-2 表記の特徴

次に、表記上の特徴を検証する。語彙テストの採点は、表記に関する次の要素に拠った(括弧内は表中の記載)。

- (1) 意味理解([意味])：提示された絵の意味が理解できる¹⁾
- (2) 音声知識([音声])：提示された絵を日本語によって音声化できる
- (3) 表記選択([表記選択])：音声化した日本語を正しい表記選択によって記入できる
- (4) 正確さ([正確さ])：文字化した日本語が表記選択以外の要素において正確である

なお、上記の要素が外国人による日本語語彙表記に関わるすべてではない。たとえば、(1)文字言語の知識はあっても音声言語の知識がない場合(文字化できるが音声化はできない)、(2)発話できるが文字言語の知識がない場合(音声化で

表4 語彙表記のパターン

1	[意味-] 或いは [意味+] [音声-]	無記入	配点 0点
2	[意味+] [音声-]	日本語以外の言語で記入	0点
3	[意味+] [音声-]	日本語ではあるが別の関連語を記入	0点
4	[意味+] [音声-] [表記選択-]	日本語ではあるが、意味が取れないほど不正確な表記であり、表記の選択にも誤りが見られる	0点
5	[意味+] [音声+] [表記選択-]	ほぼ意味は取れるが、表記の選択が誤っている(含 混在)	1点
6	[意味+] [音声+] [表記選択+] [正確さ-]	ほぼ意味の取れる表記であり、表記の選択も正しいが、部分的に誤りが見られる	2点
7	[意味+] [音声+] [表記選択+] [正確さ+]	完全に正しい表記	3点

きるが文字化できない)、(3) 平仮名と片仮名の区別を理解していない場合(表記の混同)、等が考えられる。今回の対象者に関して言えば、前述したように日本語クラスで平仮名・片仮名をすでに学習しており、日本語の仮名に二種類の表記方法があることを知っている。また、日本語の授業において、音声を文字に置き換える作業を繰り返して行っている。こうしたことを前提として、前述の要素を設定した。

語彙テストおよび上記の要素による分類の結果、今回の対象者の表記には以下の7つのパターンのあることがわかった(表4)。表中の+-の記号は、該当する知識或いは能力の有無を示している。

パターン2 ([意味+] [音声-]) の例には、以下のようなものが見られた。受験者は、ポルトガル語或いは英語で表記を行っている。

例) エスコバ(歯ブラシ)、ちゃれら(やかん)、HOSPITAL(病院)

パターン3 ([意味+] [音声-]) の例には、以下のようなものが見られた。受験者は関係性のある語や日本語の説明によって補っている。

例) たいきゅびん(郵便局)、でんしゃをまつところ(駅)

パターン4 ([意味+] [音声-] [表記選択-]) の例には、以下のようなものが見られた。表記選択が誤っている上に表記に関しても問題が見られる。音声に関する曖昧な記憶が原因であると推測される。

例) じいうそ(ジュース)、てれば(テレビ)、こんぷた(コンピューター)、かーけ(ケーキ)

パターン5 ([意味+] [音声+] [表記選択-]) の例には、以下のようなものが見られた。音声的にはほぼ正しく単語によっては完全に正確であるが、表記の選択が誤っている。耳から記憶した語彙を、平仮名・片仮名のいずれの表記で書くべきか不明のまま記入したものと推測される。

例) ほたと(ポテト)、ちょこれと(チョコレート)、らーみん(ラーメン)、おれんじじゅうす(オレンジジュース)

パターン6 ([意味+] [音声+] [表記選択+] [正確さ-]) の例には、次のようなものが見られた。表記の選択は正しくなされているが、長音や促音など表記に一部誤りが見られる。

例) スーブン(スプーン)、ベド(ベッド)、まどう(窓)、びょうい(病院)、ねすみ(ねずみ)、しゃかいも(じゃがいも)

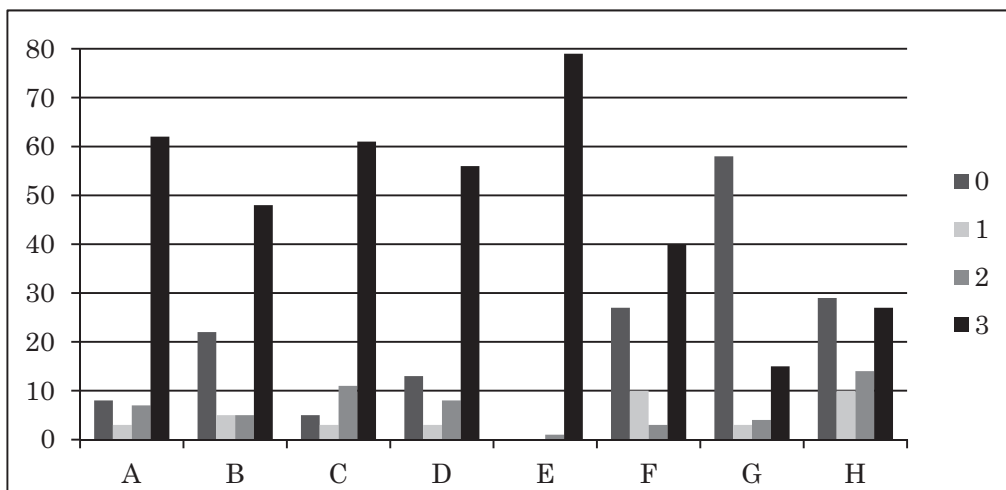


図2 語彙テストにおける点数と語数

語彙テストにおける点数毎の語数を、図3に示す。3点代の語数の多少は受験者それぞれの総得点と対応している。得点率が50%前後のFとHは、0点と3点の語の中間に位置する1点（表記選択の誤り）と2点（不正確な表記）の語を多く抱えている。

特にFは、表記選択の誤りの多いことが特徴である。Fの答案には、音声的に正確かほぼ正確な以下のような表記が見られた。Fの知っている語彙の多くは音声によるものであり、おそらく表記する機会はほとんどないものと推測される。

ぼたと（ポテト）、とまと（トマト）、チョコレート（チョコレート）、らめん（ラーメン）、はんぱが（ハンバーガー）、おれんじじゅうす（オレンジジュース）、みるく（ミルク）ぼるぺん（ボールペン）、ぱそこん（パソコン）、どあ（ドア）

なお参考までに、今回の語彙テストで解答者の表記選択が誤っていた語と、当該語が『みんなの日本語初級I』において提示されていたか否かを表に示す（表5）。ラーメン、ハンバーガーなど、日常生活で親しみのある語で、かつ日本語の授業では取り上げられない語彙の多くは、おそらく対

表5 表記選択が誤っていた語とテキスト内の提示の有無

単語	提示の有無	単語	提示の有無
けしゴム（7人）注	提示あり	ドア（1人）	提示あり
ラーメン（4人）	提示なし	パソコン（1人）	提示あり
ペン（4人）	提示なし	ポテト（1人）	提示なし
ジュース（3人）	提示あり	トマト（1人）	提示なし
ハンバーガー（3人）	提示なし	コーヒー（1人）	提示あり
チョコレート（2人）	提示あり	ノート（1人）	提示あり
けいたい（2人）	提示なし	バス（1人）	提示あり
ふろ（1人）	提示あり	テレビ（1人）	提示あり
ミルク（1人）	提示あり	コンピューター（1人）	提示あり
カメラ（1人）	提示あり		

象者にとって音声のみの語彙であり、平仮名で表記される可能性が高い。

3. 考察

今回テストを受けた外国人学校の生徒は、平仮名・片仮名の2種類の表記を学んでいる。習得している語彙の中には、耳から獲得された音声言語としての語彙が含まれており、表記にあたって片仮名を選択すべきかどうか判断できないケースがある。日常的に日本語を表記する機会が少ない(読む機会も同様に少ないと考えられる)ことが、表記選択の誤用の生じる原因であると考えられる。

片仮名表記の選択が生じるのは、主として名詞語彙である。したがって、表記選択の指導を語彙学習と並行して体系的・明示的に行うことが必要だろう。

外国人学習者の仮名表記の選択に関する問題は、漢字表記の問題ほどには取り上げられてこなかった。しかし、漢字表記に至る前段階で、学習者には平仮名・片仮名の表記選択という「ハードル」が存在することに本来留意すべきだろう。特に、日常生活において主に耳から日本語を身に着ける人々が、文字言語としての日本語を音声言語にかなり遅れて開始する場合には、従来の清音・濁音や長音などの表記の正確さと同程度に、表記選択に関する指導を重視しなければならない。この傾向は、在住外国人の増加にともなって、今後ますます進むものを推測される。したがって、日本語能力を測定する際には、表記選択(片仮名選択)に関する理解度を測定する試験の実施も考慮すべきだろう。

さらに、表記選択に関する学習においては、日本語の語彙に「外来語」なるグループが存在し、片仮名表記を行うことによって、日本人は当該語が外国由来であることを認識していることを、文字表記に関する基本的な知識として教授することが必要である。

4. 今後の課題

本稿では、外国人学校の生徒に対する語彙指導から得られた特徴を分析した。今後は、片仮名語

のリストを提示するなど、学習者の語彙知識を整理するための補助的な資料を提示するとともに、音声から文字へと移行する学習者のための教材開発を行う予定である。

注

- 1) 提示された絵の意味が理解できたかどうかは、今回のような形式のテストでは判断できない。以前、面談形式で語彙知識の調査を行った際には、日本文化と関連性の強い事物や食習慣、固有の動植物などの語彙を提示した際、絵が何を意味しているのかわからないケースが見られた。

参考文献

- 安藤淑子(2010)「多文化共生に関わる大学と地域貢献活動とカリキュラム統合に関する研究」『大学と地域の連携による多文化共生推進プロジェクト』山梨県立大学地域研究交流センター
- (2011 a)「多文化共生に関わる大学と地域貢献活動とカリキュラム統合に関する研究(継続)」『大学と地域の連携による多文化共生推進プロジェクト2』山梨県立大学地域研究交流センター
- (2011 b)「ブラジル人学校と大学を結んだ遠隔日本語教育～初級学習者に対するブレンディッドラーニングの試み～」『山梨国際研究 山梨県立大学国際政策学部紀要』第6号 山梨県立大学国際政策学部

*本研究は、平成23年度地域研究交流センター共同プロジェクト「大学と外国人学校を繋いだ遠隔日本語教育に関する研究 ～指導方法の確立と教材化を目指して～」の一部である。